

## 1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業  
2002年11月 ロンドン大学UCL 考古学研究所修士課程修了 学位取得 修士（文化遺産研究）  
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了 学位取得 修士（文化経営学）  
2004年5-7月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント  
2005年6-8月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント  
2009年10月 ロンドン大学UCL 考古学研究所博士課程修了 学位取得 博士（パブリックアーケオロジー）  
2010年9月 ロンドン大学UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer）  
2011年9月 セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate）  
2011年9月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer）  
2014年8月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）芸術・メディア・アメリカ研究学科（School of Art, Media and American Studies）准教授（Lecturer）（組織再編）  
2015年1月 イーストアングリア大学高等教育実践準修士課程修了 学位取得 準修士（高等教育実践）  
2015年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

文化資源学、文化遺産研究、パブリックアーケオロジー、博物館研究

### b 研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館研究、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちで関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジーという領域に強い関心をもってきた。現在は、古墳と地域住民の関係史、そして自然災害に対する社会の記憶というテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっている。

### c 概要と自己評価

2016～2017年度は主に、（1）日本と欧州における文化遺産保護の理念と制度、（2）古墳と地域住民との関係史、（3）自然災害に対する社会の記憶、（4）東京大学本郷キャンパスという文化資源、という4つのテーマに絞って研究を遂行した。平成28年度東京大学卓越研究員に選ばれたことによって、いずれの研究テーマも集中的に考察することができた。

（1）「日本と欧州における文化遺産保護の理念と制度」については、論考出版と学会発表によって成果を公開してきたが、とりわけ『Reconsidering Cultural Heritage in East Asia』の本をオープンアクセス出版したことによって、理論考察に関する一つの区切りをつけることができた。また、自らが研究代表者をつとめる科研費プロジェクト「考古遺跡を発掘調査終了後に地域の文化資源として活用する方法論の検討」の推進を通じて、イタリアのソマ・ヴェスヴィアーナにある古代ローマ遺跡（東京大学が発掘調査中）を社会的に利活用するための方策を検討する資料・データを蓄積した。

（2）「古墳と地域住民の関係史」については、これまでに数年かけて各地の古墳に関する文献精査ならびに現地調査を精力的に行ってきたが、「古墳と地域社会の近現代史」の論考をまとめたことによって、いよいよ分析結果を公開していく段階に入った。数年以内には著作物としてまとめたいと考えている。

（3）「自然災害に対する社会の記憶」に関しては、理論考察を行うための文献精査を終了し、また同時並行で進めてきた現地調査で集めたデータ群も質的・量的に充実してきた。この成果の一端は、2019年に予定されているイタリアの国立ナポリ考古学博物館での展覧会「伊日の火山文化」によって公表するつもりである。

(4)「東京大学本郷キャンパスという文化資源」については、2015年10月に東京大学に着任して以来、資料とデータを積極的に集積してきたが、その成果を公開できる段階に入りつつある。公開に際しては、学術出版と同時に、実際に本郷キャンパスをプレゼンテーションする方策も考える予定である。

#### d 主要業績

##### (1) 著書

編著、Akira Matsuda and Luisa Mengoni、『Reconsidering Cultural Heritage in East Asia』、Ubiquity Press、2016.9

##### (2) 論文・論考

松田陽、「イギリスの考古学事情」、『考古学ジャーナル』、684、34-36頁、2016.6

松田陽、「欧州における遺跡保護」、『月刊文化財』、634、20-23頁、2016.7

Akira Matsuda、「A Consideration of Public Archaeology Theories」、『Public Archaeology』、15(1)、40-49頁、2016.10

松田陽、「古墳と地域社会の近現代史」、『遺跡学研究』、14、24-33頁、2017

松田陽、「WAC-8における決議の採択」、『考古学研究』、63(4)、7-9頁、2017

松田陽、「文化資源学の観点から見た水中遺跡」、『水中遺跡の歴史学』、215-225頁、2018.3

### 3. 主な社会活動

#### (1) 行政

省庁、文化庁、文化審議会臨時委員、2016.3～2017.3、文化審議会委員、2017.4～2018.3

省庁、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会調査委員、2016.4～2018.3

自治体、川崎市教育委員会、川崎市橘樹官衙遺跡群調査整備委員会委員、2016.4～2018.3

自治体、市川市教育委員会、市川市博物館協議会委員、2017.7～

その他、文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会委員、2016.4～2018.3